

数とその配列が挙げられ、さらにそれぞれのパージョンの手書きの書き入れが英語で翻訳されている。残念ながら、各医書の書き入れ全てが翻訳されているわけではなく、著者の都合により部分的に翻訳されている。その他、第1章及び第2章では本文の序が英語で翻訳され分析されている。第3章及び第6章では、書き入れに引用されている書物が挙げられているが、日本医書があまり引用されていないことについて著者は不思議に思っており、説得力ある説明がない。中国に対する日本医師の博大な知識とその忠実さを反映するものと見るべきだろう。また、その引用された医書の分析によって、すべての医書の書き入れは1760年から19世紀初頭の間には書き入れられたと著者は述べている。第7章では、『眼科新書』がオーストリア人ブレンキの名著の日本語訳であるので、ルカシュは『眼科新書』の書き入れを分析する前に、ブレンキの業績、彼の著作の内容と、19世紀日本における眼科の歴史を紹介する。第8章では、コロンビア大学所蔵の『医学正伝』の書き入れを課題としているが、コロンビア大学の都合により著者は原文のコピーを8頁しか入手できなかったため、他の章に比べて、この本の書き入れはあまり研究されていない。この章は省いた方が良かったかもしれない。

最後に、付録として著者は18世紀末京都の茶

屋におけるオランダ外科医と日本医師との虚構の対話を語っている。日本の医学に対する西洋人の興味の原因、中国と日本の古医書における秘伝、日本における西洋医学の伝播、日本と西洋医学の違い、林子平の事件、松平定信の政策、儒学の教育など、さまざまな話題にわたりながら、著者は読者に江戸時代後期の医学界の雰囲気味わわせてくれる。

若干の翻訳上の問題が認められるとしても、本書は英文によるこれまでにない、中国と日本の古医書における手書きの書き入れを総合的かつ新鮮に紹介する書籍である。著者は言葉の障壁を越え、現存資料の比較調査を行いながら、欧文と和文の先行研究を引用し、十分な注釈を施しているため、日本の古医書を知らない読者にも江戸時代の医師がどのように医書から知識を得たかが総合的に理解できる。『産論翼』の書き入れの翻訳では、「医案」の例も挙げられており、当時の日本医師が理論的な知識をどのように自分の臨床に取り入れたかを考える上で興味深く、当時の医師教育に関する意義ある情報だと思われる。今後は、西洋と日本の古医書の書き入れについての詳細な比較研究も期待したい。

(ヴィグル・マティアス)

[Amsterdam: Wayenborgh, 2010, 21×30 cm, 234pp.]

秦 温信 著

『北辰の如く』

副題は「関場不二彦伝」となっている。著者の秦温信先生は札幌社会保険総合病院院長であり、北海道医史学研究会の幹事でもある。著者は2005年(平成17年)7月に『北国から、さわやかな風を』と題して出版している。今回はかねてから関場不二彦が執筆した『西医学東漸史話』に関心をもって調査研究をはじめたことがきっかけとなり、その成果といえるものが本書である。

関場不二彦(以下不二彦と略す)は帝国大学医

科大学を卒業、スクリバ外科医局で研鑽、区立札幌病院に赴任した。のちに北海道医師会、札幌市医師会の会長を兼務して地域医療の先頭にたち活躍した。初代会長としてその功績を記念し、両医師会館に胸像がおかれ、歴代会長の写真のトップにかざれている。不二彦に関して過去に記述された主な著書・論文をあげると、1966年(昭和41年)に誕生百年を迎え、北海道医師会が中心となり、『関場理堂選集』を記念出版した。理堂は不

二彦の号である。選集は不二彦を研究する際の基本史料になっている。同年に年譜が「北海道医報」に12回にわたって連載された。また各種人名辞典などにも記述されている。1996年（平成8年）『札幌市医師会史昭和完結編』に筆者が「初代会長関場不二彦とその周辺」と題して執筆している。

さて秦先生の執筆された『北辰の如く』（関場不二彦伝）は四六判289頁で、参考文献、年表が付いている。カバー写真は1874年（明治6年）に建設した開拓使札幌本庁舎で、現在は北海道開拓の村に一部移設した庁舎の写真である。広く明るい青空、そして庁舎には北辰旗が風にひらめいている。題名にふさわしいカバー表紙である。

内容をみると、まず不二彦の写真、真筆の稿本の一部、蔵書印、書斎の木額、書斎でくつろいでいる不二彦の姿、そして関場家の家系図が巻頭にある。本文は序章から終章まで9章からなっている。序章は「北の大地に立つ影」である。帝国大学医科大学スクリバ外科医局から出向し、区立札幌病院に赴任し、札幌駅頭に立ち北の天空を眺めたとき、まず曾祖父関場春温のことを思ったことであろう。曾祖父は1808年（文化5年）ロシアの来襲に備えて幕府の命により蝦夷地に出兵した会津藩士の1人で、利尻島で病死していた。墓まいりに行きたいと念じたことであろう。第1章「会津燃ゆ」では、会津藩が戊辰戦争で官軍の攻撃をうけ敗北して、下北半島に移封されたことに触れている。極寒の地で土地はやせており、生活するには最悪の地であった。この土地で会津藩士家族は極貧のなかで助け合い、将来を子弟に託して熱心に教育をした。この不屈の精神が不二彦の人格形成につながっていった。第2章は「帝州の都へ」である。父忠武が県庁職員となり、さらに東京出張所に赴任し一家は青森から東京に転居した。不二彦は湯島小学校から東京師範学校附属小学校にすすみ、1978（明治11年）卒業した。前年に西南戦争が勃発。旧会津藩士は戊辰戦争で朝敵とされた恨をはらすため官軍となり九州に渡った。第3章は「西洋と東洋」である。小学校を卒業した不二彦は外国語（ドイツ語）を学ぶかわら、漢学を学んだ。不二彦は生涯多くの漢詩をの

こしている。東京外国語学校でドイツ語を学び、東京大学医学部予備門（予科）に入学、本科へとすすみ帝国大学医科大学を卒業した。不二彦は西洋医学で西洋を漢学で東洋を学んだ。第4章は「北への旅立ち」である。1889年（明治22年）明治憲法発布の年に不二彦は大学卒業と同時期に関悦子と結婚した。新居から大学附属医院に通勤して、終生の恩師となるスクリバの門下として指導をうけることを願い外科医局に入った。医局ではスクリバの「門下十哲」の1人として俊才の同僚に恵まれ、外科を専攻することができた。第5章は「北海の鯨野に下る」である。医局から北海道庁に出向し、区立札幌病院（1869年、明治2年に開拓使が設立した札幌病院が前身でセンター病院の役割を担った）に勤務し、病院長になると医療と経営そして人間関係に悩んだ。第6章「北海に泳ぐ」では、札幌病院を退職、開業医として独立したことに触れている。関場医院で外来診療、手術を行い、市民の信頼をえてやがて北海病院に発展した。パッチェラーとともにアイヌ病室をつくり診療し、のちに『アイヌ医事談』を執筆した。また有志とともに札幌人類学会（のちの北海道人類学会）を設立し、「北海道人類学会雑誌」を発行した。東京から恩師ベルツが石狩を訪れた際には同行している。第7章は「きららかな北辰の如く」である。北海病院を後任にたくし、ドイツに留学、ベルリン大学に入学した。第27回外科学会に出席した活潑な討論に学会の意義を見出した。日本から北海病院の内紛の報に接し、北海病院を北辰病院と改称して帰国をいそぎ、再建にのりだした。その後の不二彦の活動は本書にゆずるとして、特筆すべきは『西医学東漸史話』の執筆出版である。不二彦は日本外科学会の創立に参加し、のちに宿題報告をしている。また医学生時代から医史に関心をもち、調査研究し執筆していた。自宅には「瀬祭魚書屋」と称した書庫をつくり、万卷の書籍などを所蔵したといわれている。かねてから西洋医学がいかにして東洋の日本に導入されたか熱心に調査研究し、それを3冊にまとめた著書が『史話』である。名著として必読の書である。

『北辰の如く』の帯に「関場不二彦」は新渡戸稲

造のいう「BUSHIDO」(智・仁・勇)の精神を体現しつづけた」と強調し、武士道の精神を通して医療人の一生を貫いた関場不二彦を著者は語ろうとしたのではなかろうか。ぜひ一読をお願いしたい。

(島田 保久)

[北海道出版企画センター、〒001-0018 札幌市北区北18条西6丁目2-47, TEL. 011(737)1755, 2011年3月, 四六判, 289頁, 2,000円+税]

荒井保男 著

『日本近代医学の^{あけぼの}黎明——横浜医療事始め——』

安政4(1858)年に日米修好通商条約が締結され、同様の条約がイギリス・フランス・オランダ・ロシアとも締結されたことによって、横浜・箱館・新潟・神戸・長崎の五港が開港されることとなった。翌安政5年には、横浜をはじめとした港に多くの外国人たちが訪れ、諸外国の新しい文化を広めていったのである。

2009年は横浜開港150周年ということもあり、各地で記念行事が催されたことも記憶に新しい。本書も横浜市立大学医学部における横浜開港150周年記念講演での著者の講演をもとに企画されたものであるという。

本書の著者である荒井保男氏は、横浜における医史学の第一人者であり特に横浜の医療とD.B.シモンズに関する研究については数々の論文や学会発表、著作が残されている。荒井氏の緻密な史料収集と分析によって、シモンズについての知られざる部分が次々を明らかにされたことは、医史学会会員の方々の記憶に残っていると思う。

本書では、日本が開国してすぐに開かれた港を持ち江戸に近い土地柄の横浜に、幕末から明治初期に海外から様々な新しいものがもたらされたことに注目して、IからVIIまで7章が組み立てられている。

本書で取り上げられている話題について少し触れておきたい。近代西洋医学事始めとしてはJ.C.ヘボンを取り上げ、近代外科学のはじめでは横浜軍陣病院とW.ウィリスについて書かれている。IV章の横浜医療とシモンズでは、シモンズがどれほど横浜の医療に貢献したかが著者の収集した豊富な史料や参考文献を元に書かれており、今さらながらシモンズの功績を実感させられる。

上記の章以外にも横浜が発祥であったのか、と再確認させられる章がある。医学の周辺分野として西洋歯科医学の発祥の地であることや、歯科医第一号の小幡英之助について語られている。また公衆便所や製氷、石鹼製造のはじまりなどについても興味深い。医史学的事象とその時代背景が重なって、より幕末から明治にかけての横浜という場所が鮮明に浮かび上がる。

また、本書を読み進む中で著者の意見に深くうなずいた点がある。横浜に近い東京には東京大学があり、お雇い教師が医学の教鞭を執り医療活動を担っていた。一方、横浜では民間の宣教医師またはどこにも所属しない来日外国人医師たちが居留地内で活動をしていたのである。

このような民間の来日外国人医師たちの活動に光をあてた著者の記述は見事である。お雇い外国人教師たちの経歴等は公文書として現在も遺されているが、ヘボンをはじめとした民間の来日外国人医師たちの経歴や活動については断片的でしかない。著者の長年にわたる調査研究によって、こうした人々の活動が明らかにされたことは非常に大切なことであると言える。

著者が本書に『日本近代医学の^{あけぼの}黎明——横浜医療事始め——』と題名を付けた意図がはっきりとした、医史学に属する立場に限らず一般の人々にも日本における近代医学のはじめについて知ることのできる一冊である。

(高安 伸子)

[中央公論新社、〒104-8320 東京都中央区京橋2-8-7, TEL. 03(3563)1261, 2011年3月, 四六判, 248頁, 1,800円+税]